

2007. 4

自選

五十首

梅内美華子



うめない・みかこ 一九七〇年青森県八戸市生まれ。馬場あき子に師事、「かりん」所属、編集委員。学生時代に京大短歌会参加。九一年角川短歌賞、二〇〇一年現代短歌新人賞受賞。歌集に『横断歩道』『若月祭』『火太郎』『夏羽』。

階段を二段跳びして上がりゆく待ち合わせのなき北大路駅

「今日は笑わないから」という友のいて昼のカレーにコロツケ落とす

空をゆく鳥の上には何がある ゼブラソール 横断歩道に立ち止まる夏

古書店に赤き文学全集のさびたるは酸き林檎のような

生き物をかなしと言いでこのわれに寄りかかるなよ 君は男だ

われよりもしずかに眠るその胸にテニスボールをころがしてみる

むきあいて雑誌をめくる二人へと手を振る画面のアントニオ猪木

一度にわれを咲かせるようにくちづけけるベンチに厚き本を落として

「悪いけど」を必ずつけて頼む君月草の瑠璃とんぼに喰わす

京都より電話をすれば「おお」と言いたただそのみの北に住む父

『横断歩道』

ゆるゆると怒りは萎えて立ったまま固きトマトを丸かじりする
目の奥に奔馬一頭残りたり空を撫で吹く櫂の木立

大いなる空振りありてこれならばまだ好いていよう五月の男
若きゆえ庇われている羞しさの鶏冠とさかのように腫れゆく思い

夏の風キリンの首を降りてきて誰からも遠くいたき昼なり

ティーバッグのもめんの糸を引き上げてこそばゆくなるゆうぐれの耳

乳房当たらぬように抜け来し雑踏の振り返りたれば秋のまたたき

団栗の帽子のとれてしまいたる寒き実を閉じやがて開く掌て

抱きながら背骨を指に押すひとの赤蜻蛉あきつかもしれないわれは

みつばちが君の肉体を飛ぶような半音階を上がるくちづけ

デッキにてでぶのボーイング見てあればきーんきーんとかなしき金属

右腕にうすくなりゆく黒子あり消えなば誰の身に発芽する

夢に来る普賢菩薩ふげんぼさつの乗り物のかなしき鼻は雪に濡れおり

わが首に咬みつくように哭く君をおどろきながら幹になりゆく

截るごとにキャベツ泣くゆえ太るときもいかに泣きしと思うゆうぐれ

肩衣かたぎぬに白き満月浮かばせて狂言師去る月を見よ、月を見よ

ひと泣きしてたつぷりとまた食べに来るきつねうどん あなたも食べていますか

スピックスのわれが投げにし言葉の輪からんと君の首に落ちたり

ごんごんとわが吊鐘が積まれゆく鐘に飛び込む女見てより

白壺を割りたるように開ききり泰山木厚きかけらを落とす

「若月祭」

「火太郎」

私は飲食おんじきの歌を比較的よく書くし、ほかの人が詠う飲食の歌も気になる。私は美食家でも何でもなく、ふつうに食いしん坊なだけだが、食べ物が登場する歌で食欲をそそられたことがある。少し不覚だったが、読者をその気にさせるのだからすごい歌だったのだと思う。映像が発達し、情報量も多い世の中で、限られた言葉数による短い詩型の表現が、映像に劣らず食欲を喚起するなんて。私もそんな歌が作りたい。

飲食は卑近な素材で、「万葉集」は例外として和歌の時代にはほとんど詠まれてこなかった。近代に入り歌の素材が身近な日常生活のものにひろがってからようやく見られるようになるが、現代短歌に入ってから急激に増えて一つの分野をなすまでになった。

食といえば近代歌人の中では圧倒的に斎藤茂吉である。うなぎ、白桃、餅、納

つんつくつんつくつんと揺れながら下駄の少女が橋渡りくる
夕波は人の遊びを拭きとりて湿りたる縄返し置くのみ

百合ひらき卵巢ひらき雷雲の湧くを見ているおみなのからだ

友の子ら車中にかたまりわれを視るひっそりと世界を感じる眼

あおむけに水に浮くときひっそりと背中のかなこ開くと思えり

女より生まれ出でしを問うことなきイエスを思う思えばみぞれ

とんびの巢ふさりと落ちてここからはもう冬ですと告げる木のあり

木の下にたくさんの蝶を生んでいる南の国に果てにし叔父は

赤き赤き大きな梅干しひとつ載せ食済ませたり母の一椀

ブロンズの兵士の背に刻まれしへさんたまりあゝのひらがなが飛ぶ

普賢といふ白梅散つて春の闇 三日月の目に象わらふなり

鼻差にて負けたる馬の顔伸びて永久直進してゐる月夜

抱きそこねし卵の上に立つ感じ海猫にもあり冷えゆくたまご

木の下に見る青時雨透きとほり死者たちは地に沁みこみてゆく

夏の雲 ゴム手袋がつかみだす海鼠の小さき角も光りぬ

たましひを押し出すごとく白おにぎり喪の厨よりかがやきて出る

「それは灰」と誰かが言へば骨ひろふ箸の先にて祖母くづれたり

夏羽の白きレースに恋を呼ぶ鷺にいちはやく風は宿れり

戦争は旧を付されて遠くなる旧日本兵でありし祖父

口中に泥の香はしり夏至の日の鯉の洗ひのつめたい白さ

「夏羽」

豆など食べ物に念頭にある歌はいそいそとしてゐる。茂吉の食の歌にはあきらかに食欲が付随しており、リビドーとともにその生命力の強さを感じさせる。私が近代短歌の中で好きな歌は北原白秋の「サラダとり白きソースをかけてましきみしき春の思ひ出のため」や岡本かの子の「はてしなきおもひよりほつと起きあがり栗まんじゅうをひとつ喰べぬ」である。白秋は都会のセンチメンタリズムをサラダの白いソースに、かの子は女人の物思いの茫洋とした豊かさと栗饅頭の親しさを合わせる。食べ物存在感が作者の感性や存在感に通じているのが面白い。最近出会った食の歌で心に残ったのは「豆飯を炊けばみどりのうすぐもり籠もよ み籠持ち 木杓子持ちて・小島ゆかり」と「コンビニのサラダ食べてる荒んだ眼 前世はたぶん害虫でした・榎田純子」現代の食の風景、心の風景として対極的な歌である。「万葉集」のフレーズをいかしたおもしろいので健やかな歌と、疲労感があり自虐的な視線で自分を客体化している歌。この二つの風景のどちらも他人事ではないし、これらが共存するのが現代の「飲食」の歌であろう。